

日本における市民倫理の形成と崩壊(社会の大衆化と人間疎外)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2011-01-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤田, 美実 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8762

日本における市民倫理の形成と崩壊

(社会の大衆化と人間疎外)

藤 田 美 実

第1章 日本の近代化の持つ諸性格

第2章 社会の大衆化

第3章 ホワイト・カラーと人間疎外

第4章 市民倫理の変質と崩壊

第1章 日本の近代化の持つ諸性格

(1)

私は前稿(明治大学和泉校舎研究室紀要, 第28号)において, 明治維新が市民社会革命となり得なかった原因のいくつかについて考察した。もちろんその考察は極めて不十分なものであるが, その中に現代の社会構造と現代人のパーソナリティを理解するためのいくつかの要素を見出すことができると思う。それを列記すれば次の如くである。

(1) 日本に市民社会形成の過程がなかったということは, 市民がみずからの手で自己の社会をつくった経験がないということの意味する。江戸時代の日本の都市が権力のため権力によってつくられたものであったのと同様に, 明治以後の日本の社会も常に他から与えられたものであり, 日本の社会は市民にとって fremd であったといわねばならない。

(2) 日本の近代史には権力に対する抵抗の歴史がなく, 権力と戦って自己の社会, 自己のモラルを築くという伝統がなかったということは, 今日日本人の権威主義を生み出す。近代倫理の特徴である自律の倫理や抵抗のモラルはそこから生れてこないで, 服従と献身のモラルだけが生れてくる。このことは日本に自由の歴史がなかったという言葉でおきかえることができる。自由は権利

の自覚に基づいた権力との闘争のうちにかちとられたものであるが、そのような伝統を持たないわが国においては、自由は単なる恣意の形で、あるいはそれに対する「自由には責任が伴わねばならぬ」というような道学者流の教説としてしか現われぬ。

(3) 階級的自覚の欠如。これは徳川時代の武士階級や上層商人において特に著しい。即ち中間階級における階級意識の欠如である。

(4) 封建制下における市民のこれらの性格は強力な権力政治の結果であるが、また反対にこれは幕藩権力の絶対化の原因でもある。この絶対主義化は政治的指導者の道徳的墮落を招来する。政治の墮落は市民の政治に対する不信と無関心を結果する。日本人の政治的感覚の未熟は政治の墮落の原因であるとともに結果でもある。

(5) このような政治の墮落、更に政治権力と大商人との結託は、特に物品の贈取という形をとる。この慣習が市民の間に伝播して今日まで残存している。尊敬とか感謝という人格的、情緒的なものが単なる物品に還元され、形式化される。また封建社会における道徳は礼儀作法に置きかえられ、それは更に三つ指で平身低頭するという単なる形式にまで形骸化され、しかもそれが人格的価値と混同される。このような混同は近代倫理の成育を著しく阻害する。

(6) 封建都市の性格。前稿に記したように、封建制下の日本の都市は権力によって権力のためにつくられたものであり、産業革命を伴わずして人口を増大した。このことは下層市民の増大を結果したばかりではなく、日本の都市をして西欧の都市にみるように生産と商品交換の場たらしめるよりは、より多く消費の場たらしめた。また幕府は武士や商人を農民から隔離して身分制度を強化し、商品経済を都市の内部に封鎖しようとした。この政策は経済的にも文化的にも都市と農村の落差の増大を招来した。また例えば江戸にみるように、その都市人口の性別比は町人において男32万人、女18万人というように極めて不均衡であり、これに武家人口を加えればその不均衡は更に増大するであろう。これは貨幣経済の発達と相まって都市の享楽的性格を決定づけるものである。す

なわち日本の都市は生産と商品交換の場であるよりは消費の場であり、更に享楽の場であった。近代化とは常に都市化であるが、日本における近代化はこのような性格における都市化であった。

(7) 伝統の欠如と断絶の欠如。明治維新における近代化とは日本的なものの廃棄と西欧文化の輸入であって、俗にいう木に竹をついだようなもので、そのために近代日本には伝統がないといわれる。市民みずからの力によってではなく外部の力によって他律的に近代化が行われる後進国の宿命であるが、それは伝統の欠如をもたらすだけでなく、それは同時に歴史の断絶の欠如を意味する。市民が本当に古いものを憎み、過去を否定して新しい社会と文化をつくるという過程を持たないということは、市民の意識の底において歴史の断絶がないことを意味する。ルネッサンスも宗教改革も市民社会革命もなしに近代化した日本においては、ルネッサンス以前のもの、宗教改革以前のもの、市民社会革命以前のものが近代の中に平然として雑居している。伝統の欠如は近代日本文化の大きな特徴であるが、断絶の欠如による意識の雑居性は急速な近代化を可能にするとともに近代精神の定着を著しく阻害するものである。

近代倫理の本質的特徴は合理性と人間性と自律性であるといえるが、日本の精神的風土はこのような近代倫理が定着するには極めて不毛であったといわねばならない。

(2)

明治維新ならびにそれ以後の日本近代思想史については既に幾多のすぐれた研究がなされているし、その簡単な梗概は既に記述したことがあるので(拙著「人間性の倫理」第6章参照)、ここでは前節と同じように現代の社会構造と現代人のパーソナリティを理解するのに必要ないくつかの特徴を列挙することにする。

(1) 明治維新の性格については講座派と労農派との論争以来すでに論じつくされた感があるが、要するに急速に統一国家を完成し外国の圧力に抵抗するために絶対主義の形をとりながら、内容的には西欧諸国の諸制度をとりいれて、不

完全ながらも市民社会を形成して行った。この絶対主義の確立と市民社会の形成という両側面は第二次世界大戦に到るまで相拮抗しながら進んで行くが、ともに不徹底に終わってしまった。軍国主義の段階に入ってもドイツのナチズムやイタリーのファシズムのような完備した独裁制たり得なかったし、大正期のデモクラシー運動もあくまで天皇制の枠内におけるそれではあり得なかった。明治維新が絶対主義革命であったと共に市民社会革命であった（正確に言えばそれは革命ではなかった）という二重性格はそれ以後の日本を特徴づけるものであり、ここにも日本思想の雑居性の原因がある。

(2) 明治維新以後の日本の近代化は西欧文化の輸入であって、しかもそれは極めて急速に行われる。ことに科学、技術の急速な近代化は資本主義の急激な発達を促したが、この日本文化の速成性は経済的にも日本人の社会意識の面においても落差の増大を結果し、さらに都市と農村の落差を拡大する。

(3) 科学、技術とともに思想、ことにドイツ観念論の輸入も急速に行われるが、ルネッサンス以来の伝統を持ち、そのような伝統の上にもみ可能な思想が、その内面的歴史的必然性を持たないままに輸入され、思想は市民の生活意識から遊離したものになってしまう。カール・レヴィットのいうように「階下では日本的に考えたり感じたりするし、二階にはプラトンからハイデッガーに至るまでのヨーロッパの学問が紐に通したように並べてある」⁽¹⁾ という現象が生れる。この思想の雑居性も近代精神の定着を阻害するものである。

(4) 科学や観念論哲学の輸入は、日本においてその伝統が極めて薄弱であった合理的精神を育成する上において大いに貢献したが、それは前述したように生活意識に密着したものでなかったために、権力と対決する場合にはもろくも崩壊して行った。ことに徹底した皇国史観教育のために歴史科学的判断力が窒息させられてしまったことは、合理的精神の育成にとって最大の障害となった。

(5) 西欧においてはルネッサンスと宗教改革によって個人が組織から解放されたが、明治維新は遂に個人を解放しなかった。個人の自覚が生れる一つの原動力になったのは内村鑑三などにみられるようにキリスト教の輸入であり、他の

一つは北村透谷や大正期のヒューマニストにみられるように社会からの逃避の形においてであった。そのために本当の個人の倫理も社会の倫理も生れなかった。神島二郎氏の言を借りれば「西欧においては十の私を公に媒介するのにたいして、日本においては一の私を公に媒介する」^{アックス}(2)という形をとる。したがって「国家はありえても社会はありえず、社会なくして人民も市民もありえない」^{アックス}(3)ことになる。このような性格は市民倫理の展開を著しく妨げるものである。

(6) 日本において近代化とは西欧化であり、西欧的なものが近代的と考えられ、模倣と流行追随性が日本人の大きな性格となる。たとえば昭和初期のマルキシズムの流行も日本の風土に根をおろしたものではなかったし、その後にくるジイドやニーチェやシュストフやハイデッガーなどのいわゆる不安の思想や実存主義の流行も、西欧においては極端化した近代的合理主義に対する批判であり超克であるが、日本においては超克されるほどに合理的精神がまだ育成していないのに、西欧思想の輸入によって未熟な近代精神がその芽をつみとられてしまう。明治から大正、大正から昭和へと歴史のテンポが速くなるにつれて、この追随の速度も早くなる。この主体性の喪失と流行追随性はいつまでたっても近代精神の定着を不可能にする。

(7) 近代大都市の性格。徳川時代に江戸が既に世界一の大都会であったことは前稿で述べたが、明治以降も人口の都市集中は依然として継続する。その原因を考えてみると、(イ) 強力な中央集権化。(ロ) 日本人の権威主義。(ハ) 都市産業の発達と農村の貧困化による労働人口の都市流入。(ニ) 既に述べたように急速な西欧化は都市を先頭として行われるために、都市と農村の文化的・経済的落差は非常に大きくなり、文化的ということは都会的であるということになる。この落差は都市への吸引力となる。(ホ) 江戸の町が既にそうであった消費性と享楽性はさらに強まり、これも都市への吸引力となる。これら都市集中の原因はそのまま現代の大都市の性格となり、都市人のパーソナリティを形成する。

第2章 社会の大衆化

(1)

西欧においては永い中世の封建的支配の後に、ルネッサンスと宗教改革を通して、この封建的組織の中から孤立した個人が放り出された。中世は権威と理性の支配した時代であるが、今やその権威は失われ、理性が支配する近代が始まる。ここに西欧近代精神の基底をなす個人主義と合理主義が生れるのであり、この孤立した個人を理性をもって再編成する社会形態が市民社会である。したがって市民社会は個人主義と合理主義を根幹とし、ブルジョアジーの自由と平等を原理とする社会であるが、十七世紀から十八世紀にかけてそれぞれの国によりそれぞれの段階を経て進展し、産業革命によって完全な展開を示し、十九世紀の前半において黄金時代を迎える。この時代にカントの個人主義と理性主義の倫理と、幸福と自由平等を原理とする功利主義が生れてくる。これは自由主義経済の発展に照応するものであるが、十九世紀の後半に入って資本主義の独占化と階級分裂、ドイツを中心とする第二次産業革命とナショナリズムの興隆に伴ない、市民社会は崩壊の過程に入り、大衆化の現象が現れる。二十世紀に入って二度の大戦によってこの過程は進度をはやめ、いわゆる大衆社会を現出する。

社会大衆化の要因としては一般に四つの面がかぞえられている^{○(4)} 即ち、(イ) 政治的には選挙権の拡大による大衆の政治への参与、(ロ) 経済的には資本の独占化、(ハ) 文化的にはマス・コミュニケーションの発達、(ニ) 科学・技術の発達による生産の機械化と生産性の向上、である。第一の選挙権の拡大によって有権者の数は飛躍的に増大し、この量の変化は質の変化をもたらす。それは大衆の政治意識を高めることになるが、反面では十分な政治的判断力又は関心を持たない大衆が政治を支配することになり、政治は大衆に迎合するか又は表面においては大衆に密着しながら内面においては大衆から完全に遊離したところで政治が取引される。政治家はあらゆる機会を利用して大衆のエネルギー

を利用しようとする。大衆はここに「疑似的権威」⁽⁵⁾を形成する。第二に資本の独占化はミルズがえがいたような無気力なホワイト・カラーをうみ出すとともに、労働者と労働の場との遊離は人間疎外を結果する。第三にマス・コミュニケーションの発達は大衆の文化意識を向上させるとともに、それを均一化する。新聞や雑誌のような「読む」というメディアからテレビジョンやラジオのような「見る」「聞く」というメディアへの転化はマスコミュニケーションの受容を容易にするばかりではなく、その受容の態度を積極的態度から受働的態度へ転化せしめる。マス・コミュニケーションを積極的にうけいれるのではなく、マス・コミュニケーションが「大衆の生活に浸透」し、「大衆を侵略」⁽⁶⁾するのである。この均一化と受働性がマスを形成する。第四に科学・技術の発達は生産性を向上させ賃金の比較的上昇を招き、生活程度を向上させる。しかし他方では機械化され得ない小企業との格差を増大する。生産の機械化は高度の技術を不要ならしめ、余暇をつくり出すとともに人間を機械の奴隷とする。これらは消費文化を産み出すとともに人間疎外を結果する。

これらは大衆化の一般的要因であるが、日本においては既に大正末期において、あるいはさらにさかのぼって徳川時代中期に大衆化の現象がみられるということもいえるが、端的にこの現象がみられるのは第二次大戦の敗戦後である。敗戦によって日本人ははじめて天皇制から解放され、個人が放出されて、漸く市民社会の形成が始まるとともに、急速に大衆化していった。西欧においては二、三百年の永い市民社会形成の時代を経て大衆化の現象がみられるのであるが、わが国においては市民社会の形成と社会の大衆化が同時に起るのである。明治維新が市民社会革命であるとともに絶対主義革命であるという二重性格を持っていたように、今次の敗戦は市民社会の形成であるとともに社会の大衆化であるという二重性格を持つのであって、この二つの二重性格が現代日本の社会構造を決定づけているといえることができる。即ち日本においては市民社会が未熟なままに大衆化され、自由の伝統がないままに解放され、市民倫理が定着しないままに否定されて行く。そこに今日の社会と道徳の混乱が生じてく

る。

日本における大衆化の現象はその歴史的特殊性の故に上述の四つの一般的要因だけでは説明されないものを持っている。まず戦前にさかのぼって昭和三年頃から数年間のマルキシズムの流行と、そのあとに危機の哲学とか不安の思想などの名前で近代精神の超克がとえられ、非合理主義が説かれ、ロマン主義が知識階級の一部に浸透していったことを記憶せねばならない。それは大衆時代と似た相貌を持っている。ドイツのナチズムが十九世紀末以来のホワイト・カラーによって支持されたように、日本の軍国主義はそのような大衆化を前提としている。

さて戦後の日本社会の大衆化の特殊要因として考えられるものは、まず第一にアメリカの大衆文化とその諸制度の輸入があげられる。ことにその教育制度の移入によって高等教育は異常に普及するが、教育の程度はそれに比例して低下した。それは単に程度を低下させたばかりでなく、質的に全くその内容を変えてしまう。学問の内容とは全く遊離した有名校というようなわが国独特の概念をつくりあげ、多量のホワイト・カラーを生み出すことになり、これはわが国の社会構造を変質させてしまう。第二に戦後のインフレーションによって中産階級の俸給が物価の騰貴に比して上昇しなかったのに対して賃金労働者の賃金の上昇率が高く、また闇商人などの収入が俸給生活者のそれをはるかに上廻ったことなどが、いわゆるパブリックスに対するマスの比較的上昇を結果した。しかし何よりも重要なのは権威の崩壊であり、社会構造そのものの解体である。戦争中の強固な組織から孤立した個人が放り出され、ここに始めて市民倫理の形成が試みられる。しかし彼等は自律の倫理を身につけていなかったし、彼等を受け容れるべき市民社会の伝統もなかったし、合理主義の歴史も持っていなかった。ここに急速な大衆化の現象が生じ、アモルフなカオスの世界、個人の集群が生れる。

その後の驚異的な経済復興と経済成長、独占資本の再編成、技術の異常な進歩、生産と社会そのものの合理化、泰平ムードといわれるみかけ上の社会の安

定、ラジオ、テレビジョンの普及と家庭生活への滲透などがこの現象を促進する。

(2)

このような原因から生じた大衆化はどのような現象を結果するかということについて若干の考察をしてみよう。

(1) 社会の大衆化はエリート層への大衆の流入を意味する。マンハイムによればエリートの量的増加は第一にその閉鎖性を打ち破って「稔り多き多様性が招来される」⁽⁷⁾が、「この多様性は散漫性に道を譲り」、⁽⁸⁾社会への影響力を失ってしまう。第二に新しい思想や文化はそのような散漫な世界においては成熟せず、その創造性を失ってしまう。「新しい衝動や直観や新鮮な世界観は、それらが小集団内で成熟する暇をもたないならば、大衆には単なる刺戟として理解されるに止まるであろう」⁽⁹⁾。そうして「創造的な能力や業績の代りに、常に新しい刺戟を求める渴望が絶えず増大している」⁽¹⁰⁾のみるのである。第三はエリート選択の原理の変化である。昔の貴族社会においては血統が、市民社会においては財産が、近代民主主義社会においては業績がその原理となった。しかし今や大衆社会は「一定集団の権力闘争における要因として業績の原理を放棄しようとする傾向」⁽¹¹⁾を示し、突如として「血統その他の基準」⁽¹²⁾を設立しようとする。わが国においては学歴や肩書のような形骸化されたものが選択の原理となり、むしろ原理そのものの喪失であるということがいえよう。こうしてエリートは創造性を失い、無力化し、社会への影響力を失う。大衆社会は指導原理を失い、散漫化し、アノミー化して行く。

(2) 次に合理性の変化である。科学・技術の異常な進歩に伴って生産手段は高度に機械化され合理化されて行くし、社会構造も大規模になるとともに極度に複雑化し合理化される。しかし生産の合理化や社会機構の合理化は個人の実質的合理性をもたらさない。「平均的な普通人は、機能的に合理化された行為複合に順応する新しい行動をする度ごとに、彼ら自身の文化的個性をいくぶんかずつ放棄する。彼らは、ますます他人に指導されることに慣れるようになり、漸

次独自の見解を捨てて他人が考えてくれるものを受け入れるようになる」⁽¹³⁾。市民社会においては市民の理性が支配したが、大衆社会においては非理性が支配する。あるいはそれは「大衆の理性」と呼ばれるべきであるかも知れない。とすればそれは感覚的理性、思考を伴わない受働的理性である。社会の合理性と個人の非合理性という二重性格は大衆社会の特徴である。

(3) 社会の空洞化。社会機構が巨大化し複雑化すると、社会を操作する特別の階層が生れる。前述のように大衆がそれに対して受身的な態度しかとらなくなると、両者の間に空洞が生じてくる。大衆の社会的・政治的無関心は空洞化の原因でもあり結果でもある。篠原一氏は統計的資料にもとずいて、わが国の民衆の政治的関心度が外国に比してかならずしも低くないことを示しているが⁽¹⁴⁾、そのような統計によって示される量的な問題よりも、議員の間に選挙法改正委員会をつくると、それは刑務所の規則を囚人につくらせるようなものだと言う、そういう民衆の関心のあり方、関心の質が問題なのである。政治は民衆から全く隔離されたところで行われる。ここに官僚主義が育成してくる。日本の官僚制はマックス・ウェーバーなどが分析したような西欧諸国の官僚主義の成立とは異った性格を持っている。その近代化の過程において民衆がみずからの力によって権力をかちとるという経験を持たず、社会の変革は常に権力の単なる交替でしかなかった日本においては、政治家というものは民衆にとって縁遠い特殊な階層であり、政界の腐敗とともに常にそこには不信が支配した。しかも日本人は常に権力に支配され、依存してきた。社会の空洞をみたましているものはこのような不信と依存感である。

(4) 都市性。近代化は都市化であることはすでに述べたが、敗戦後の日本はことに急速に都市化して、日本全体が都市的性格をおびて行く。都市的性格は今日の大衆の性格を端的に示しているといえる。磯村英一氏はリーマー、エリクセン、クイン等の説をひいて都市人のパーソナリティを列挙している。⁽¹⁵⁾その主なものをあげてみると次の如くである。(イ) 環節状化。都市人は多数の集団に分属して、その場に応じて自分を使いわける。従って各集団間の紐帯は弱く、

そのためにマス・メディアやスローガンの餌食となる危険性がある。(d) ステレオタイプ。個人間の接触が多様であるために外見によって他人を判断し、または見てから判断するのではなく、判断してから見る。(e) 自動化。機械によって自動的に行動を左右される。(f) 物質主義。他人を手段として利用し、人の価値を交換価値と同一にみなす。(g) 標準化。大量生産によって衣、食、住、趣味、言動などが均一化し、中性化する。(h) 私秘性。他人と一面的にしか接触せず、しかも他人と情緒的交渉を持つことを避け、無関心さをよそおう。(i) 匿名性。(j) 個人主義。(k) 時間的。行動は時間によって規制され、時間が貴重なものであり、距離も時間によってはかられる。(l) 打算性。(m) コスモポリタニズム。他人に対して無関心であり、異質なものに対して寛容である。(n) 享楽にあきた態度、などである。また市村友雄氏は都市人の長所として開放的、個性的、寛容性、合理性などを挙げ、短所として一時性、表面性、詭弁性、懐疑性などをあげている。⁽¹⁶⁾

しかしここで特に重要なのは消費性又は享楽性の問題と疎外の問題である。日本の都市が特に消費の場であり、更に享楽の場であったことは既に述べた。今次の敗戦は日本人の欲望を解放した。近代化の一つの要素は欲望の解放であるが、西欧諸国においては欲望の解放が生産の刺戟となり、生産の向上が欲望の解放を促し、相互に相関連しつつ資本主義社会を育成して行った。日本においては戦後の破産状態において欲望だけが解放された。その後の急速且つ飛躍的な生産性の向上はその商品市場を拡大するために民衆の欲望を刺戟することに専念する。そういう跛行的な形で進行する。しかも日本の貧困の故にその欲望はみたされない。従って欲求不満のままにつきつぎと新しい刺戟だけを求め、しかもその欲望が満たされないという自虚性を生む。再生産のための消費や慰安ではなく、享楽のための享楽、刺戟のための刺戟を求める。ラジオやテレビジョンなどのマス・メディアはその点において重要な役割を果す。そういう形での消費性と享楽性は都市において最もよく現れており、大衆文化の重要な要素となる。次に疎外の問題がある。都市人は前述のように相互に情緒的関

係に深入りすることを避けるために相互に疎外しあう。また大都市の周辺にいわゆるベッドタウンができるように、彼等の居住地と労働の場とが地域を異にするためにいずれの地域集団からも疎外される。これについては後述する。

第3章 ホワイト・カラーと人間疎外

(1)

大衆社会のもっとも重要な現象はホワイト・カラーの増加と人間疎外である。まずホワイト・カラー増加の原因としてミルズは次の三つをあげている。「(1) 経済の各局面に技術と合理性が導入された結果、経済界で従来とは異なる種類の熟練が必要とされるようになったこと、(2) 商品市場および資本市場における市場活動が大規模化したこと、(3) 組織が拡大されると調整・管理・記録などの仕事が特に必要になり、その結果分業組織に変化をきたしたこと」⁽¹⁷⁾などである。即ち、製造工業における機械化、分配事業の拡大、調整業務の規模の拡大、であり、⁽¹⁸⁾ 物を扱う職業の従事者数よりも、「人間」や「象徴」を対象とする職業の従事者数が増加したのである。⁽¹⁹⁾

ホワイト・カラーの労働条件は、まず第一に他の誰かに雇用されていることである。即ち彼等は生産手段を持っていない。第二に、生産の機械化に伴ってその労働は単純になり、ミルズによれば「1930年代を通じて少なくとも1000万乃至1200万の人が、自分のもっているレベル以下の技倆しか必要としない仕事に働いていた。」⁽²⁰⁾ 第三に、生産の分業化の結果、彼等は労働の過程からも生産物からも切り離されてしまう。⁽²¹⁾ 第四に、彼等は機械に支配され、労働においてそのパーソナリティを失ってしまう。こうして「彼等はその労働をそれ自体としては無意味なものと考え、労働における不満はそのままにしておいて他の生活分野で生き甲斐を見出そうとする。」⁽²²⁾「現代のほとんどすべての労働には、労働それ自体は不愉快なものであるとする宿命的な感覚がつきまといっている。」⁽²³⁾ こうして職人的労働とちがって、近代的労働においては労働と余暇は分裂し、労働は単なる手段に化してしまう。日本における調査の統計をみて

も「仕事そのものに喜びを感じるよりも、その収入で生活を楽しみたい」というものと、「生活を楽しむよりも、仕事そのものに生甲斐を感じたい」というものとを比較すると、前者が57%、後者は33%である。⁽²⁴⁾

さらに日本のホワイト・カラーの労働条件の重要な点は、終身雇用制と年功序列制という独特の雇用制度である。このエスカレーター・システムは彼等の将来の活躍の展望を著しくせばめ、労働をより退屈なものたらしめ、努力と研究の熱意を奪い、彼等を無為無力にし、視野を狭くし、ことなかれ主義におちいらせる。労働組合はこの傾向を助長し、経営者はこのような無力化したホワイト・カラーを経営方式に利用する。やはり前記の調査の統計において、現在の仕事に満足している者の数が平均70%もある⁽²⁵⁾ということをも、多くの者が現在の仕事に喜びを感じていると解してはならないであろう。むしろ終身雇用制と年功序列制に慣れた無為・無力感の現れではないだろうか。彼等が読む新聞記事は三面記事67%で第一位、次はスポーツ記事56%、政治25%、政治解説25%、見るテレビジョンの番組ではスポーツ48%で第一位という統計⁽²⁶⁾は、日本のホワイト・カラーの生活態度を示している。

労働が目的ではなくして手段となり余暇が目的となったということは、目的と手段との転倒というよりは目的の喪失である。「労働の価値を定めるものは労働自体ではなく、その労働によって楽しみうる余暇の価値によって定まる。」⁽²⁷⁾その娯楽も大量生産化され、規格化されたところの、他から与えられたものである。しかも「このような娯楽は人間を驚かし興奮させ気分を紛らせはするが、理性や感性を豊かにし、自発的な獨創性を涵養するようなものではない。」⁽²⁸⁾さらにミルズの表現を借りれば、「かれらはみずからは、何一つ生産せず、のどから手が出るほど欲しいが、自分のものにはならない財貨を、ただ右から左へ素通りさせる仲介者の役を果すだけである。……彼はその労働の生産物からは切りはなされ、連日きまりきった書類事務をくり返しているだけであり、やりきれなくなつて暇な時間には、彼に売りつけられる安っぽい娯楽に気をまぎらしたり、結局は精神的緊張をやわらげることにはならない一時的な

興奮に身をまかせたりする。こうして仕事には倦み疲れ、娯楽にも真の休息は得られず、このやりきれない悪循環をくり返しているうちに、貴重なエネルギーを消費してしまう。」⁽²⁹⁾「このように、社会からも、生産物からも、自我からも、疎外された存在、個人的には自由と合理性を剥奪され、政治的には麻痺状態にある存在」⁽³⁰⁾それがミルズのえがいたホワイト・カラーである。

「ホワイト・カラーという微力な人間の意識と、現代の諸問題との間には、無関心というヴェイルがかかっている。」⁽³¹⁾社会から疎外された彼等が逃避するところは、消費と家庭である。パーソナリティの市場において自我をさえも切り売りしなければならない彼等は、消費においてそのパーソナリティを回復しようとする。しかし日本の都市の性格は消費的であるよりも享乐的であることは既に述べた。しかもその消費や享楽さえも大量生産された規格品であった。そこで満されるべき欲望はみずからの内からなる欲求ではなくて、マス・メディアによってつくられた欲望であった。享楽において欲望が満されるのではなくて新しい欲望が生み出され、刺戟は刺戟をつくり出す。そこでも真の自己とつくられた自己との分裂は継続する。

彼等の最後の逃避の場は家庭である。やはり日本における調査の統計によると、生活の目標として「家庭の幸福」と答えたもの60%、「世の人々のために奉仕する」は7%、「財産をつくる」が6%、「名誉や地位」を求めるものはわずかに1%であって、⁽³²⁾ 戦前の立身出世主義的倫理は家庭団らん主義に変貌している。他の調査においても人生目標として「趣味にあった、気楽で快適な生活」と答えたものは64.7%であり、⁽³³⁾ 青少年においても、貧しくとも「平和な家庭をつくる」ことを将来の目標として選んだものが51%ある。⁽³⁴⁾ そこで篠原氏が述べているように、⁽³⁵⁾ このような生活の合理化への意欲は必ずしも社会の合理的改革への意欲と一致しない。社会に生活の合理化を妨げるものが存在する場合はこれに抵抗するが、私生活の合理化が正統化されると社会改革のエネルギーは急速に失われ、エネルギーは私生活というミクロの世界に集中される。ここにみかけ上の安定ムードが生れてくる。しかし内面においては

自我の分裂と自己実現の不可能性とはかえってますます強く意識されてくる。こうして外面の安定と内面の不安定、外面の自己満足と内面の不満、外面の合理性と内面の非合理性、現代はそのような矛盾をはらんでいる。

(2)

以上述べてきた現象のすべてを一言でいえば「人間疎外」の現象であり、現代は「疎外の時代」とか「人間不在の時代」といわれる。疎外という言葉はその意味があいまいなままに用いられているが、私は便宜的に、(1)人間性の喪失(2)人間の社会からの疎外、(3)自己疎外、の三つにおいて考察することにする。

(1) 人間性の喪失。これは人間の非人間化である。その原因の第一は科学・技術の発達による生産過程や事務の機械化である。そこで人間が機械に支配され機械の奴隷になってしまうという意味でも人間性の喪失であるが、機械化が進むと労働者の仕事は単純になり、ボタンをおしたりスイッチを入れたりというような機械的な仕事が主になるのも人間性の喪失である。学問の探究と人間形成の場であるはずの大学が単なる就職のための手段となり、尊敬や感謝というような情緒的なものが物品の贈与という物質的なものにおきかえられ、都市においては他人を物質として取扱うということも既に述べた。これらはすべて最も人間的であるはずの組織や人間関係を物質化することであり、人間性の否定である。しかし人間性を否定する最大のものは戦争である。今次大戦における近代兵器による大量殺りく、ナチのユダヤ人大量殺りく、日本人による南京大量殺りく、などはその代表的なものである。そこにおいては人間の価値や人間の尊厳性などは土くれの如く踏みにじられてしまう。

(2) 社会からの疎外。大衆社会は疎外の社会であるといえるが、その原因としては次のようなものが考えられる。(i) 社会は人間の欲求をみたすためにつくられたものであるが、人間の欲求の多様化と社会の機能の分化に従って個人は同時に多数の社会(集団)に所属するようになる。多数の集団に一時的且つ部分的に所属するということは、本質的にはどの集団にも所属しないことであり、どの集団からも疎外されることになる。遂には国家や民族というような社会に

対する帰属感さえも失われていく。逆にいえばこれは社会のアノミー化を結果する。(d) アノミー化。既に都市のもつ若干の性格とホワイト・カラーの家族団らん主義について述べた。大衆社会は家族を単位としてアノミー化した社会である。欲望の多様化は個人の孤立化を招く。どこにも自己実現の場がないし、有機的に帰属する集団もない。実存哲学者のいう *Ungeborgenheit* の現象が生れてくる。(e) 階級分裂。国家や市民社会がその階級性を現わしてくると、その帰属感は失われてしまう。独占資本の支配下においては職場はパーソナリティの市場となり、自我と会社という職場は全く別個のものになってしまう。(f) 社会の空洞化。これについては既に述べたが、現代人の社会的無関心はその原因でもあり結果でもある。そこから官僚主義が生れてくる。ことに権威に弱い日本人においてはこの傾向が強い。社会機構が非常に巨大化且つ機能化し、他方では個人がアノミー化して行くと、必然的にそこに空洞が生ずる。階級分裂によって会社から疎外された人間を収容すべき労働組合も、その組織が巨大になると、少数幹部の権力闘争の場、イデオロギー論争の場となってしまう。(g) 最後に最も重要なのは日本の近代化の持つ特殊性である。日本人はその近代化の過程において、自分の力で自分の社会を造った経験がなかったことは既に述べた。常に他から与えられた社会の中に生きてきた。即ち社会は常に彼等にとって fremd であった。日本人にとって社会は本質的に疎外の社会であった。

(3) 自己疎外。社会から疎外され、人間性を喪失した人間は必然的に自己疎外におちいらざるを得ない。従って今まで述べたことの重複になるが、その原因を列挙すれば次の通りである。(i) 社会から疎外された自己。自分が所属する社会がないということは、自己実現の場がないということであり、自己疎外である。そのようなパーソナリティの市場からのがれて、消費と娯楽に自己を求めようとしても、そこに見出されるものは真の自己ではなくして偽装された自己であり、マス・メディアによってつくられた既製品である。(ii) 目的の喪失。既に述べたように今日のホワイト・カラーにおいては労働が目的ではなくして消費が目的であった。大学は学問の探究が目的ではなくして入学することが目

的であり、それは更に就職の為の手段であり、その仕事も消費のための手段であり、消費と娯楽の中に遂に自己を見失ってしまう。目的と手段の転倒は結局目的の喪失であり、それは自己喪失である。(v) 流行追従性。日本の近代化は西欧文化の模倣であった。流行追従性と速成性が近代日本人の性格となったことは既に述べた。これが近代的自我の定着をきわめて困難にしている。(vi) マス・コミュニケーションの発達。この流行追従性は戦後のマス・コミュニケーションの発達によって拍車をかけられる。生産者は狭い商品市場において他の商品と競争するためにたえずモデル・チェンジを行い、大衆の欲望を刺戟する。大衆はマス・コミュニケーションによって与えられた既製の判断を眞の自己と混同してしまう。アノミー化した社会はマス・コミュニケーションとプロパガンダにとって絶好の活躍の場である。(vii) 均一化。高等教育の普及は大衆の知的水準を著しく高めるし、マス・メディアの発達は大衆の政治的判断力を高めるし、コマーシャルの発達は大衆の商品についての知識を高める。しかしそれは大衆を均一化し、これも個人の主体性を失わせる。そこにハイデッガーのいう *man* が生れてくる。テレビジョンの普及によって、何百万の人間が同じ時に同じものを経験し、一人の人の意見をきき、同じようなことを考えるというようなことは、戦前には想像もできなかった重要な現象である。(viii) 普遍化。都市人のパーソナリティとしてのコスモポリタニズムについて既に述べた。それは異質的なものへの寛容性であり、普遍性であるが、これもまた他方では主体性の喪失を意味する。(ix) 価値の喪失。最後に自己疎外のもっとも重要な問題は価値の問題である。先に述べた目的の喪失は価値の喪失を意味する。国家からも市民社会からも疎外された人間は社会に価値の基準を発見することはできないし、自己実現の場がない時自我も価値の基準たり得ない。安定ムードの中では自我を実現する問題もない。このような価値の喪失は犯罪や自殺などの現象を結果する。(自殺率はオーストリア、デンマーク、スイス、スウェーデンのように社会が比較的安定した国において高く、日本はその上位に位置している。⁽³⁶⁾)

第4章 市民倫理の変質と崩壊

近代は個人の解放と幸福への欲望の解放とともに始まる。しかしそれはそのままでは倫理とはならない。解放された個人を市民社会へ再編成し、欲望を抑制するところに近代市民倫理が生れる。欲望を抑制するものは社会秩序維持の原理と理性とである。前者はイギリスの功利主義によって体系化され、後者はカントの哲学によって体系化された。前者は産業革命によって興隆してきた新興資本家の経済活動を正統化したし、後者の禁欲的倫理は資本の原始的蓄積を促進した。(もちろんこういった考え方はカルヴィンにさかのぼらねばならないが、それはマックス・ウェーバーの著書に委ねる。) このような市民社会の倫理が中世末期から近世初頭の市壁にかこまれた自由都市の中でつちかわれたことは前稿で述べた。こうして経済活動・言論・信仰の自由と理性主義を原理とする市民社会の倫理が生れてくる。その徳目としては、正義、信頼、隣人愛、勤勉、質素、相互扶助などがあげられる。

日本においては今次の敗戦後にはじめて個人が解放され、皇国史観を否定して合理的思考が可能になり、市民社会の倫理が成育しうる前提条件ができた。そこでいろいろな形で天皇制倫理に代わるべき近代倫理が説かれた。しかしここでも日本の官僚主義と権威主義がわざわざいた。新しい倫理は依然として支配者によって上から説かれるという形をとった。市民の倫理は市壁を盾として権力との闘争のうちに生れたという根本精神が見失われていた。しかも自由と理性主義の伝統を持たないわが国においては、それらは空疎な教説に墮してしまふ。しかも断絶の欠如にもとづく思想の雑居性は、ここでも近代的なものに前近代的なものを混入してしまふ。たとえば「期待される人間像」にしても、「人間性を高めつつ、人間能力を開発せよ」と人間性の回復をうたっているが、今日の独占資本の支配下でいかにして人間能力を開発したらよいか、今日の間疎外の時代にどうしたら人間性を高めることができるのか、具体性を全く持っていないし、前後の脈絡もなしに突然「われわれは祖国日本を敬愛するこ

とが天皇を敬愛することと一つであることを深く考えるべきである」という全く異質的なものが平気でとび出してくる。「幸福な人間となるためには、経済的、政治的な条件が整えられる必要があることはもとよりである」といいながら、「それよりもいつそうたいせつなのは心構えであり、心のもち方である。そしてそれは感謝と畏敬の念である」という。これは明らかに上からの倫理であり、社会が個人の意識を規定するという今日の常識的考え方の無視である。昔の中国の「仁」の倫理でさえ、それは何よりも支配者に課せられた倫理だったはずである。もちろん現実の中に市民倫理を実現して行こうとする努力がないわけではない。しかしそれも「小さな親切運動」のようにミクロの世界にきよくせきしてしまう。

これらの教説が具体性と説得力を持たないのは、社会が既に大衆化の過程に入り、市民社会崩壊の過程に入っているからである。「消費が美德である」という言葉はイロニーとしてしか意味を持たないにしても、今日の独占資本の雇用形態の中で、勤勉や質素のモラルは全く意味を持たない。勤勉と質素、即ち生産性の向上と経費の節約は、今や個人のモラルではなくして企業体のモラルなのである。個人としてはできるだけ少し働いてなるべく多くの収入を得、それをいかに有効に消費するかということが問題なのである。前に述べたように倫理とは個人の欲望と全体の秩序との調和であるが、アダム・スミスの「見えざる手」やカントの「非社会的社交性」を信ずるようなオプティミズムは、資本主義の興隆期においてのみ可能だったのである。今日のアノミー化した社会において、信頼や隣人愛よりも生存競争に勝つことが問題なのである。「かつては、人々の身についた徳であったいんぎんさや親切が、ホワイト・カラーにおいては、人間性から切りはなされて、単なる形式的な生活手段の一つとなってしまった。」⁽³⁷⁾

倫理とは自分の社会をよくしようとする熱意にはかならないといえるが、元来 fremd な社会しか持たなかった日本人に、そのような熱意は期待できない。エスカレーター・システムに乗り、家族団らん主義にきよくせきする日本

のホワイト・カラーには消極的な個人主義（マイナスの私）しか生れてこない。これらすべては市民倫理の変質であり崩壊である。否、倫理そのものの否定である。既成の倫理や上からの教説を批判しながら、それに代わるべき倫理が生れてこないのは、大衆社会が本質的に非倫理的な社会形態だからである。ヘーゲルのように市民社会が人倫の否定態なのではなく、大衆社会こそ人倫の否定態なのである。

今まで大衆社会の否定的な面ばかりをあげて来たが、大衆化はそのような否定的な面ばかりを持っているわけではない。大衆社会は市民社会の階級性を無意識のうちに打破して来たし、大衆の強力なエネルギーを解放したし、あらゆる権威を打ち倒してきた。参政権の拡大、知識と教育の普及、文化生活への大衆の参与、などは真の民主主義の実現であるといえるであろう。しかし大衆社会はやはりそのままでは肯定されない。大衆社会を論ずる学者の多くは批判的または否定的な態度をとっているし、ミルズのホワイト・カラー論はやはり否定的なイロニーにあふれている。コーンハウザーによればこれには二つの面がある。一つは「19世紀において、ヨーロッパ（特にフランス）社会の革命的变化に対する反作用に根ざすもの」で、これを貴族主義的批判と呼んでいる。第二は「20世紀において、特にロシアとドイツにおける全体主義の勃興に対する反作用にもとづいているもの」で、これを民主主義的批判と呼んでいる。前者は19世紀的なエリート的価値の知的防衛であり、後者は民主的な価値の知的防衛である。⁽³⁸⁾ いづれにしてもそれは現代を市民社会的文化と市民社会的民主主義との危機と考えるものである。たしかに大衆社会の時代は一つの危機であり過渡期である。それではいかなる社会への過渡期であろうか。「将来の社会がいかなる形式をとるかを明瞭に予言することは、なにびとにも不可能である。しかしわれわれは、歴史の教えるところによって、現代の状況では過激な程に新しいものでさえ通例後代の現実においては一要因たるにすぎない、ということを知っている。」⁽³⁹⁾ 今では典雅をきわめたモーツァルトの作品も、その発表の時は奇矯さの故にごうごうたる非難をあびたのである。ストラヴィンスキー

やバルトークの作品のように。危機を転じて創造の足場とすることができるものが、いつも偉大な創造者だったのである。大衆のエネルギーを創造のエネルギーに転じ得た時に、大衆社会は価値を持ってくる。

愛国心を説く前に国家の持つ階級性を打破しなければ国家はいつまでたっても fremd であるだろう。人間性の回復と疎外の克服を説く前に、自己実現が可能な場をつくらねばならない。その為に解放された大衆のエネルギーが再組織されねばならない。中心を失った大衆に今一度中心を与える統一の原理、新しい理性を発見することこそ現代の課題でなければならない。

しかし更に現代は「人間不在の時代」といわれる。人間が真に存在していないのである。それでは人間が「存在する」ということはどういうことなのか、真に「存在する人間」とはどういう人間であるか、私はそれを次の課題にしてみたいと思う。——未完——

(後 記)

本稿は私の「日本近代倫理思想史」研究の末尾をなす部分に当るものである。しかし準備と時間の不足のために、私が今後研究すべき問題点を列挙するにとどまってしまったが、問題の整理という意味で一応発表して批判を乞わんとするものである。

註

- (1) カール・レヴィット「ヨーロッパのニヒリズム」(筑摩書房)129頁
- (2) 神島二郎「近代日本の精神構造」(岩波)186頁
- (3) 同 上 182頁
- (4) 西村勝彦「大衆社会論」(誠信書房)Ⅱ, 講座「社会学」(東大出版会)第7巻第1章 参照
- (5) コーンハウザー「大衆社会の政治」(創元新社)26頁
- (6) 岩波講座「現代」第11巻 208頁
- (7) マンハイム「変革期における人間と社会」(みすず)102頁
- (8) 同 上 102頁
- (9) 同 上 103頁
- (10) 同 上 103頁
- (11) 同 上 106頁
- (12) 同 上 106頁

- (13) 同 上 70頁
- (14) 岩波講座「現代」第11巻 334頁以下参照
- (15) 磯村英一「都市社会学研究」（有斐閣）184頁以下参照
- (16) 市村友雄「都市と農村の社会学」（時潮社）154頁以下，及び講座「社会学」第4巻 293頁以下参照
- (17) ライト・ミルズ「ホワイト・カラー」（創元新社）58頁
- (18) 同 上 55頁
- (19) 同 上 54頁
- (20) 同 上 207頁
- (21) 同 上 207頁
- (22) 同 上 211頁
- (23) 同 上 211頁
- (24) 林 知己夫その他著「日本のホワイト・カラー」（ダイヤモンド社）133頁—134頁参照
- (25) 同 上 136頁—137頁参照
- (26) 同 上 124頁以下参照
- (27) ミルズ「ホワイト・カラー」219頁
- (28) 同 上 218頁
- (29) 同 上 11頁
- (30) 同 上 14頁
- (31) 同 上 13頁
- (32) 「日本のホワイト・カラー」137頁—138頁参照
- (33) 岩波講座「現代」第11巻 325頁
- (34) 同 上 326頁
- (35) 同 上 324頁—325頁
- (36) 「現代社会学講座」（有斐閣）第6巻 78頁
- (37) ミルズ「ホワイト・カラー」12頁
- (38) コーンハウザー「大衆社会の政治」18頁
- (39) マンハイム「変革期における人間と社会」14頁